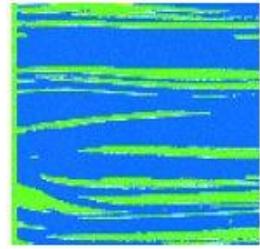


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2020年 夏号 No. 99 (2020年7月31日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 武藤 崇

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内

FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>

E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

ABAI 参加記 : 第 46 回 ABAI オンライン大会に参加して.....杉山 尚子
ABAI/SQAB 参加記 : ABAI オンライン年次大会に参加して.....高野 愛子
自著を語る : 『3 ステップで行動問題を解決するハンドブック』.....大久保 賢一
自著ではないけど語る : 『教えて! ラス・ハリス先生 ACT がわかる Q&A』.....大屋 藍子
Zoom 飲み会 : みなさん、どんな風に行動分析学を教えているんですか?.....大久保 賢一
編集後記.....ニューズレター編集部

<ABAI 参加記>

第46回ABAIオンライン大会に参加して

杉山 尚子
(星槎大学大学院)

1975 年以来、毎年 5 月の末、米国の祝日メモリアル・デイにかけて行われてきた国際行動分析学会 (ABAI) 年次大会も、COVID-19 感染拡大防止のためオンラインでの開催が決定したとの通知が届いたのは、緊急事態宣言のさなかの 4 月 23 日のことであった。本年は 2004 年のボストン大会以来 16 年ぶりに東海岸で開催されることも楽しみのひとつであり、予想されたこととはいえ心底落胆した。

オンライン大会は、予定されていた開催地ワシントンDCがある米国東部時間で運営される。したがって、日本との時差は 13 時間。開会式は東部時間で 5 月 23 日 (土) 8 時開始であり、日本では同日 21 時にあたる。この日は Zoom を使ったゼミ (ゼミ生は全国各地の社会人で週末の夜にゼミを実施) の時間を 1 時間繰り上げ、ゼミ終了後、ただちに画面を ABAI の開会式に切り替えた。しかし、夜も更けてくるとだんだんと眠くなる。そうか、web セミナーなので、質問しないかぎり自分の姿は画面に映るまい。そこで、パジャマに着替えベッドの中で iPad で視聴することを思いつき実行。以後、翌朝 8 時まで夜通し続くセッションのほとんどは、ベッドの中でパジャマ姿で聞くことにした。

しかし、聞きたい時間にアラームをセットはするも、寝落ちして聞き逃した真夜中のセッションは数知れず。その結果、リアルタイムのチャットが要求されるポスターセッションと眠気も吹き飛ばすようなセッションを除

けば、心身の健康のためにも、あらかじめ予定されていたオンデマンド視聴に頼ることにした。ちなみに眠気が吹き飛んだセッションの第一は、Alan Kazdin による会長招待講演「Treating Antisocial Behaviors Among Children and Adolescents: From Behavior to Social Context」である。

1. オンライン大会/オンデマンド視聴の功罪

1) 同一時間帯の複数のセッションに参加できる

年次大会は、日本時間で 5 月 25 日 (月) 7 時~7 時 50 分の新会長に就任した Erin Rasmussen (アイダホ州立大学)による会長講演で終結した (リアルタイムで視聴)。しかし、ABAI はあらかじめ 6 月 1 日までオンデマンド視聴を提供しており、寝落ちしたり、時間が重なって参加できなかったセッションをリストアップし、昼間の隙間時間に視聴する。近年の ABAI 年次大会は世界 50 カ国から 5,000 名が参加する規模であり、1~3 つの建物を使用し、2019 年度に用意された発表会場は約 50 室。多数の会場で同時並行でセッションが進行するから、発表者 (の有名度) と発表要旨を頼りに、いずれか 1 つを選択する。時には選択の失敗もあり、途中で会場を移りたいと思いながら、3 つの建物、50 の会場であるから、あまりに遠方で断念することも少なくない。しかし、オンライン視聴では、選択の失敗をすぐに取り戻せることである。すぐに他のセッションに切り替えも容易であり、オンデマンドであればせつか

くだから最後まで聞いて、他のセッションも視聴し放題である。同一時間帯の複数のセッションを聞けることが、オンライン大会の最大の効用であろう。

2) 停止と再生の繰り返し

また、非英語話者にとっての恩恵は、オンデマンドで視聴すれば聞き取れない部分を聞き直すことができる点である。同時に、スライドに意味がわからない重要そうな単語がある場合、いったん動画を止めて、ゆっくりと辞書を引くことができる。

3) スライドの見にくさ

オンライン大会でもっとも”イライラ”を感じたのは、スライドである。文字が多すぎ、その結果、文字が小さすぎ、読めないスライドがあまりに多い。私はふだんから院生に対して、「聞き手ファースト、読み手ファースト」をモットーに、スライドとポスター作成、論文執筆は厳しく指導する。おかげさまで、昨年度の j-ABA 大会では、多くの参加者からポスターがわかりやすいとお褒めに預かった。翻って、今回見たスライドは、私の学生であれば一見で突き返すレベルのものがかなりあった。1990年代だったと思うが、ABAI でスライド作成の手引きのようなものを見たことがあるが、その努力は全く活かされていないようである。

4) 冊子体のプログラムの消滅

ABAI はかなり以前からスマートフォンやタブレットで検索できるプログラムを配信しており、私も便利に使っているが、冊子体プログラムにも利点はある。しかし、オンライン大会決定とともに冊子体プログラムは廃止された。オンライン配信では数年前から、プログラムの全貌を電子的に見ることができなくなっており、冊子体の廃止とあいまって大変不便を感じた。オンデマンド視聴のためには、プログラム全体を見渡せる方が便

利である。また、1984年大会から参加している私はすべての冊子体プログラムを保管しており（写真1）、そのコレクションに欠落が生じたのは実に残念である。



写真1 ABAB のプログラム（1984-2019）

5) 情報交換行動の自発

6月1日までオンデマンド視聴ができるということは（実際は視聴可能期間は複数回にわたり延長された）、実質的に会期が10日間になったようなもので、情報交換行動の自発頻度が増える結果となった。要するに、参加したセッションで面白かったものをメールで他人に伝えるタクトの多発である。そして聞き手にとってそのタクトは、新たな視聴行動の先行刺激となる。おそらく、通常大会でのタクトはその場での言語的な般性好子で強化されるのに対し、オンライン大会では相手の行動変容という好子も生まれる可能性があるからであろう。

2. 振り返りミーティングとバーチャルLBS

情報交換タクトの自発の結果生まれたのが、Zoomによる振り返りミーティングである。このタクトは私のかつての教え子である林裕介さん（ペンシルヴァニア州立大学准教授）との間で自発されることが多かった。そこで林さんは毎年ABAIで顔を合わせるメンバーに呼びかけ、オンデマンド視聴期限が切れる前に情報交換会を行い、聞き逃した素晴らしいセッションを視聴する先行刺激にしようとして提案された。日本、米国の東部と西部地域居住者が参加のため、時差を勘案した結

果、日本時間で5月28日(木)午前11時開始(米国東部で27日午後10時、西部で午後7時)とし、日本からは石井拓さん(和歌山県立医科大学)、竹島浩司さん(株式会社エルチェ)、松田こずえさん(チルドレンセンター)、浦元まりさん(チルドレンセンター)、杉山、東海岸からネッポ香織さん(カペラ大学)、林裕介さん、西海岸から久留宮由貴江さん(行動コンサルタント)が参加した。

この席で私を含めほとんどの方が推奨したのは Alan Kazdin による会長招待講演であった。ABA の大御所がだんだんいなくなる現在、このような有名人が、社会的に重要な領域で高い成果をあげている様子を、大変な”熱量(林さん語録)”で語られたのには心を動かされた。Kazdin といえば、それまでは、大学院生の頃に読んで大変勉強になった *Behavior modification in applied settings* (Kazdin, 1980) と *Single-case research designs* (Kazdin, 1982) との著者という認識しかなく、「80歳は超えている、もしかすると90歳近いかも」と考える中、石井さんがすぐにネット検索し、「75歳です」と冷静に報告した時は全員が驚愕した。つまり、30代である本を書いたのである。なお、会長講演、Per Holth の「Multiple Exemplar Training: Illustrations, Limitations, and Preliminary Guidelines」、Anthony Biglan の「The Nurture Consilience: Evolving Societies That Work for Everyone」も私の推しである。

この情報交換会は視聴の先行刺激となっただけではなく、予想外の発表を推す方もあり、その意味でも大変面白く有意義であった。また、シンポジウムで話題提供された松田さんからは、発表中にリアルタイムで行われた ABAI (とおそらくエージェンシー) のプロフェッショナルな技術的サポートへの賞賛が語られた。

ところで、ABAI に欠かせないものは、Local Beer Special Interest Group (LBS または Beer SIG) である(杉山, 2009; 山本, 2010)。毎年、LBS の幹事をつとめてくださる林裕介さんは、今年は Zoom による LBS を提案され、この振り返りミーティングも、クラフトビールを楽しみながら行われたことは言うまでもない(写真2)。



写真2 振り返りミーティング

3. 最後に

同一時間帯の発表が視聴可能なこと、視聴の先行刺激となる振り返りができることなど、オンラインならびにオンデマンドならではの利点も十分感じられる大会であった。しかし、会期後、ABAI から送られたサーベイに、「次年度のサンフランシスコ大会をオンライン開催することの是非」の項目があり、それには速攻で「オンサイト希望」で回答した。やはり、ABAI は人との出会いも大切なのである。

引用文献

- Kazdin, A. E. (1980) *Behavior modification in applied settings*, 2nd ed. Long Grove, IL: Waveland Press.

Kazdin, A. E. (1982) *Single-case research designs: Methods for clinical and applied settings*. New York: Oxford University Press.

杉山尚子(2009) Local Beer SIG 誕生? :

ABAI 2009 を終えて *j-ABA News*, 54, 5-7.

山本華奈子 (2010) Local Beer SIG が結ぶご縁 *j-ABA News*, 60, 14-16.

<ABAI/SQAB 参加記>

ABAIオンライン年次大会に参加して

高野 愛子
(法政大学)

この度、「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成」を賜りまして、5月21日から25日に開催されました第46回 ABAI 年次大会でポスター発表をさせていただきました。本来はワシントン D.C. で開催されるはずでしたが、新型コロナウイルスの世界的流行に伴い、全会オンライン開催となりました。アメリカ観光に行けなかったのは少し残念でしたが、自宅に居ながらスケジュールの調整をせずに学会に参加できたのはとてもラッキーだったと思います。また、プログラムによってはビデオ録画したものを後から閲覧できるなど、世界中の人々がより負担なく参加しやすくなるような工夫が各所に為されていました（とはいえ、私が参加したポスターセッションはリアルタイムでしたが……笑）。

ポスターセッションはチャットで行われ、アブストラクトと事前にアップロードした PDF ポスター（急に「2週間後までにポスターのファイルを提出せよ」とメールが来たときは焦りました……）をオーディエンスが閲覧し、適宜発表者にメッセージを送信して質問するという形式でした。発表者はいつメッセージを受け取っても即座に対応できるよう、自身のページを開いたまま待機せよとのことで、私も午前3時から4時（日本時間）の間、パソコンの前で目をこすりながらスタンバイしていました。

私は“Variables facilitating defusion from the contextual control of the rock-pa-

per-scissors game”と題して発表を行ったのですが、オーディエンスの方に優しく温かいメッセージを頂いたのがとても嬉しく、大変楽しい時間を過ごすことができました。一方で、頂いたメッセージにすぐに返信するのにタイピングが追いつかず、まごついている間に「面白い発表ありがとう！じゃあね！」とオーディエンスの方が去って行ってしまふこともあり、「もっとお話したかったのに……」と自身の英語力の未熟さとタイピングの遅さに歯痒さも感じました。私の場合訪問して下さった方は責任在席時間の1時間で3人ほどでしたが、人気のあるポスターではおそらく複数人から引切りなしに質問攻めに合っていたのではないのでしょうか。別々の内容のメッセージを同時に捌きるのはきっと大変だろうと思いつつ、多くの人に興味を持って頂けるのはとても光栄なことですので、私もそのような素敵な発表に少しでも近づけるよう努力を重ねていきたいと思いました。

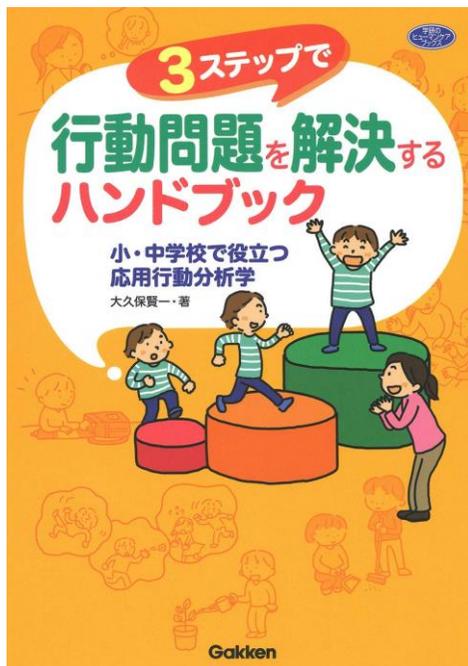
国際学会に興味を持っている学生の皆さまに、拙文が少しでも参考になれば幸いです。最後になりますが、今回の ABAI 参加にあたり、「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成」の対象者にご選考下さいましたことに、この場を借りて心より御礼申し上げます。

<自著を語る>

『3ステップで行動問題を解決するハンドブック:小中学校で役立つ応用行動分析学』

大久保 賢一

(畿央大学)



もう1年以上前になるのですが、「3ステップで行動問題を解決するハンドブック」という本を出版しました。内容は、大きく第1章「望ましい行動を育てる」、第2章「問題となる行動を解決する」、第3章「行動支援の成果を広げて定着させる」に分かれており、それぞれに「3ステップ」（第3章はなぜか2ステップ・・・）を設定して、実践を行う上での方略について順序立てて検討できるような構成になっています。

ちなみに第1章「望ましい行動を育てる」は・・・

ステップ	小タイトル	扱う内容
1	スモールステップの目標設定	シェイピング、課題分析とチェイニング
2	自力のできるヒントの提供	プロンプト
3	やりたくなるしかけづくり	強化、強化子のアセスメント、トークンエコノミー

第2章「問題となる行動を解決する」は・・・

ステップ	小タイトル	扱う内容
1	問題の理由を探り出す	機能的アセスメント
2	目標を設定する	代替行動の設定など
3	作戦を立てて実行に移す	方略立案、行動支援計画の実施・評価・修正など

第3章「行動支援の成果を広げて定着させる」は・・・

ステップ	小タイトル	扱う内容
1	ここでもできた！を増やす	般化と維持
2	チームで取り組む	チームアプローチの実際

・・・といった内容になっています。

また第 4 章においては、「おしゃべりをやめてくれない」(ABC 分析)、「学校に行けなくなった」(シェイピング)、「係活動に取り組んでくれない」(課題分析とトークンエコノミー)、「手伝わなければやらない」(プロンプト)、「クラスメイトとのトラブルが絶えない」(「要求」の機能を持つ行動に対する支援)、「不安なことからすぐに逃げる」(「逃避」の機能を持つ行動に対する支援)、「クラス全体が落ち着かない」(学級規模の支援)といった事例に対して、1 章から 3 章で扱った内容を応用して解決するというストーリーが描かれています。

この本の読者として想定しているのは、小学校の通常学級の担任の先生方ですが、特別支援学級や特別支援学校の先生方にもお役立ていただける内容であると思います。また、福祉関係者の方々や親御さんにもご活用いただける内容であると思います。

本を執筆する上で心がけたのは、「とにかくわかりやすくする」、「そういうのあるある!というリアリティを持たせる」、「現場で奮闘している方々に『これならできそう!』『ちょっと明日からやってみようかな』とっていただける内容にする」ということでした。

その試みが達成されているかどうかは、読者の皆さまの判断に委ねたいと思いますが、「わかりやすさ」を重視するあまり用語や概念の学問的な厳密性が損なわれている部分があるかもしれません。ご批判は甘んじて受け入れたいと思います m(_ _)m

この記事を書くにあたり久しぶりに Amazon でこの本を検索してみたのですが、発売後 1 年以上を経過しているにも関わらず、Amazon の売れ筋ランキング (2020/07/9) で「生徒指導」カテゴリで 8 位にランクインしていました!

お買い上げくださった皆さま、本当にありがとうございました。感想など Amazon レビューに書いていただければさらに嬉しいです。

<自著ではないけど語る>

『教えて！ラス・ハリス先生 ACTがわかるQ&A—セラピストのためのつまずきポイントガイド—』

大屋 藍子

(同志社大学)

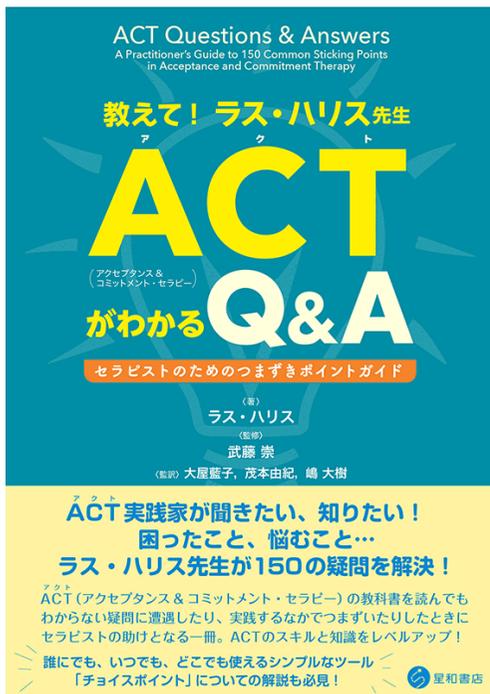


図 1. 『教えて！ラス・ハリス先生 ACTがわかる Q&A』

(Harris, 2018 武藤監修 大屋・茂本・嶋監訳 2020)。

本書は, ”ACT Questions & Answers: A Practitioner’s Guide to 150 Common Sticking Points in Acceptance & Commitment Therapy” (Harris, 2018) の邦訳書である (図 1)。アクセプタンス&コミットメント・セラピー (Acceptance & Commitment Therapy: 以下 ACT とする) の実践家がセラピーに行き詰まったときに生じる疑問が挙げられ, それに著者の

Russ Harris 氏が回答する形式の専門家向け書籍である。Harris 氏は, ACT のトレーナーとして国際的に活躍している医師・心理療法家である。邦訳書も多数出版されている。Harris 氏の解説はとても分かりやすく (初めて Harris 氏の書籍に接する読者には『よくわかる ACT』 (Harris, 2009 武藤監訳 2012) がオススメ), 本書も実践家の先生方の役に立てれば大変有難い。

言わずもがな, ACT は行動分析学の研究成果に基づいて開発されたセラピーである (例えば Hayes, Brownstein, Zettle, Rosenfarb, & Korn, 1986)。対人援助では, しばしば, 不適応的な問題行動を強化せず, 適応的な目標行動を強化する分化強化が実施される。同様に, ACT では環境への感受性を失った非柔軟な回避行動を問題とし, そうした行動を強化せず, その一方で環境へ適応する目標行動を強化する分化強化を実施する。そして, 自分らしい生き方という観点から, 目標行動が強化される随伴性をルール (ACT では価値と呼ぶ) として記述し, 行動を形成する際に確立操作として活用する。本書も, 第 5 章で機能分析を扱っている他, 随所に上記のような行動分析学の概念が散りばめられている。この中で, 全体を通して Harris 氏が使用する「チョイスポイント」というツールが, かなりシンプルで説明しやすいため, 本欄で共有したい。

チョイスポイントとは、狭義には問題行動と目標行動を選択する際の岐路を示す(図2)。クライアントとのセッションにおいては、問題行動が生じている先行事象(状況, 考えや気持ち)を特定し、そのときを取ってしまう問題行動を左側(逸れる, 原書では *Away*)に記述する。そして、私達が問題行動を取ってしまうのは、先行事象に引っかかってしまう、釣られてしまっている(*Hooked*)からだとクライアントに伝える。個人的には、そのように伝えることで、行動が環境との相互作用で生じているニュアンスが伝わりやすいのではないかと思う。同時に、目標行動を明確にし、右側(進む, 原書では *Towards*)に記述する。そして、同じ先行事象であっても、釣られてしまう自分を事象から「はずす」(*Unhooked*)ことができれば目標行動を実行しやすくなることを伝え、「はずす」スキルの形成を目指す。「はずす」スキルの中には、対言語刺激も含んだ刺激統制や、強化的な結果事象の確認などが挙げられる。さらに、価値を確立操作として用いれば、より目標行動を実行しやすくなる。つまり、分化強化の概念をシンプルに図示したものがチョイスポイントと考えることが可能なのである。

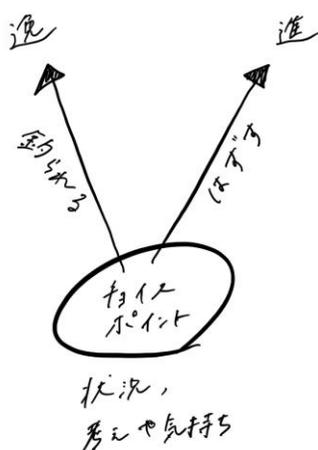


図2. チョイスポイント(Harris (2018 武藤監修 大屋・茂本・嶋監訳 2020))を手描きで示す。セッション中思いついたときに手描きで示すことができる。

例えば、新型コロナウイルス感染症の拡大ですっかり在宅勤務が板についた私にとって、どのように運動習慣を維持するかが課題であるが、いざ決めた時間が来ると「今日は忙しい気がする」「明日の天気の方が走るのに相応しい気がする」「昨日の歩数で十分だった気がする」といった言語行動が生じる。これがチョイスポイントを生み出す状況であろう。この状況に引っかかってしまうと、家でOuluの海外ドラマを見続けてしまう。これが問題行動=目標行動を形成する方向から逸れた状態である。それに対し、ジョギング用のウェアを事前に準備していたり、アラームをつけていたり、走った後他者に報告する約束を思い出すことで、私は(走りたいかどうかは置いておいて)外へ走りに出かけることができる。これが目標行動を形成する方向へ進んでいる状態である。理想的には、走れば身体がスッキリすることなんかも自覚すれば、行動が持続する可能性が高まる。お恥ずかしいのでこれらを図2に書き足さないが、実際には矢印の左やら右やらに随時書き加えながら、行動や操作を視覚化する。実践家はこれをクライアントと共有し、クライアントの行動パターンを示すことができる。機能分析・心理教育・行動変容、セラピーのどのプロセスにも活用できる。

このシンプルなツールは、繰り返す問題行動パターンや目標行動を促進するアイデアを図に沿って書き加えていくだけのものなので、行動分析学の登り口から入っていないACT実践家でも使用しやすいと考えられる。ただしこのテンプレートが万能というわけではないし、いかなるツールも原理を理解してこそ使いこなせるものだろう。本書でも、ハリス氏がさらっと「機能分析をせずにチョイスポイントを使うことは不可能」と明言している(Harris, 2018 武藤監修 大屋・茂本・嶋監訳 2020, p109)。そういうわけで、登り口は違っても、本書を手にとってくれたACT実践家の方が「うーん、もうちょっとかゆいところに手が届くようになりたい!」「がっつり知りたい!」と思ってくれて、

行動分析学の登山道に合流してくれたら、そうやって行動分析学の仲間が増えてくれたら嬉しい。

参考文献

Harris, R. (2009). *ACT Made Simple: An Easy-To-Read Primer on Acceptance and Commitment Therapy*. Oakland, CA: New Harbinger.

(ハリス, R. 武藤 崇 (監訳) (2012). よくわかる ACT (アクセプタンス&コミットメント・セラピー)—明日からつかえる ACT 入門— 星和書店)

Harris, R. (2018). *ACT Questions & Answers: A Practitioner's Guide to 150 Common Sticking Points in Acceptance & Commit-*

ment Therapy. Oakland, CA: Context Press.

(ハリス, R. 武藤 崇 (監修) 大屋藍子・茂本由紀・嶋 大樹 (監訳) (2020). 教えて! ラス・ハリス先生 ACT がわかる Q&A—セラピストのためのつまずきポイントガイド— 星和書店)

Hayes, S. C., Brownstein, A. J., Zettle, R. D., Rosenfarb, I., & Korn, Z. (1986). Rule-governed behavior and sensitivity to changing consequences of responding. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, *45*, 237-256.

<Zoom飲み会>

みなさん、どんな風に行動分析学を
教えているんですか？

大久保 賢一

(畿央大学)



これは「Zoom 飲み会」のイメージ画像です。記事内容が事実であるのかフィクションであるのかについては、読者のご想像にお任せします(^^)

「皆さんはどんな風に行動分析学を教えているんですか？」

きっかけはとあるオンライン掲示板におけるAの書き込みであった。何人かのメンバーがその書き込みにレスポンスしたが、結論としてはとにかくこの年に流行した「オンライン飲み会」を開こうということになった。「マジメに議論したい者」、「とにかく何かおしゃべりしたい者」、

「とにかく酒が飲みたい者」、皆のニーズを満たすことができるはずである。

当日約束の時間になり、最初にログインしたのはBであった。しかしBが見たZoomの画面には風呂上がりの自分の顔が映っているだけ。時間通りに全員がそろっているとは思ってはいなかったものの、まさか自分一人であるとは思っていなかったBは、とりあえずTwitterに

「Zoom 飲み会誰もおらんやんけ！」と呟いた。そしてしばらく雑用を片づけながら他のメンバーのログインを待つことにした。

10分ほど経ち、Cが入ってきた。

「Bちゃん久しぶり～！広島の学会で一緒に飲んだとき以来だね！」

Cのテンションは基本的にいつも高い。

「いやあ、あの時は、俺、次の日の朝一でシンポジウムがあったのに、Cくんが強引に明け方まで付き合わせるから・・・」

「何言ってるの！Bちゃんも楽しそうにしてたやん！」

Cはログイン早々既に酔っているようにみえたが、まあいつものことである。世間話をしているとAとDとEも加わり、予定より30分ほど遅れて宴は始まった。

まずは簡単な挨拶や世間話などで幕を開けた。「p値ハッキング」や「プレレジ」の話題など、いかにも最近の心理学者っぽい話題についても触れられたが、このような場では人の噂話で盛り上がるものと相場が決まっている。この集いもその例外ではなかった。その流れの中でカリキュラムの話題になり、「皆さんはどんな風に行動分析学を教えているんですか？」という本来のトピックに軌道修正されることになった。

以下、誰の発言であるかは省略。

「公認心理師のカリキュラムでは、『学習・言語』でくくるじゃない？え、そこを一緒にするの？みたいな」

「いやあ、そもそも学部教育でどこまでを求めるかによりますよね～」

「うちの学部なんて、自分以外の教員の専門が〇〇なもので、まあ学生が混乱しちゃって混乱しちゃって・・・」

「ひええ」

「やっぱり現場で少しでも役に立つことを教えてあげたいとは思うよね」

「それは教員養成課程も同じですね」

「じゃあ一体何が『役に立つ』のかってところが問題になりますね」

「実際の実践・臨床に関わる技術的なことは最低限教えておいた方がいいとは思うけど、科学的な知見も含めて教えるべきかどうかというところは正直悩ましいところ」

「その場合の『科学的』っていうのは、査読付きの論文があるって意味？」

「それもあるけど、科学的な原理原則を知っておかないと対象者に合わせて手続きを微調整したり、結果に応じて手続きを修正したりすることが難しくなるじゃないですか」

「そもそも行動分析学の中で応用やってる人って、どこまで基礎の研究知見をフォローしているんだろうか？」

「まあ教科書レベルの原理原則は勉強してるだろうけど、『最新の知見』と言われればほとんどの人がフォローできていないでしょうね。基礎と応用の断裂とまではいわなくても、密接にリンクしているともいえないかも」

「やっぱり心理師や教員の養成課程においては、手続き論的な内容だけではなく、概論的な内容も必要であるような気はしますね」

「ちょっと話は逸れるんですけど、自分もそもそも養成課程で一通り教えようとするところ自体が幻想だと思うんですよ。現場で身につけないと無理なことなんてたくさんありますよ」

「もちろん心理師にせよ教員にせよ、その職責の本来の機能が発揮されるためには養成課程・現職研修・職場環境の全てを考慮に入れる必要があって、本来はその全体をきちんと構想してからその一部分である養成課程の話をしなないといけないでしょうね」

「例えばSWPBSとかはその『全体』を構想したモデルであって、現職研修や職場環境の随伴性にもかなり着目していますね」

「行動分析家はすぐに『随伴性』って言うがるな！」

「まあ概論的な知識も必要だとは思うんです」

けど、とりあえず養成課程では『独立変数を操作して対象の行動を変える』という経験は絶対に必要だと思うんですよ」

「なるほど。そういう意味では例えば動物実験とかは学部のうちから経験しておいて欲しいよね」

「子ども対象の臨床でもそうですよ。『○○したからこうなった』と行動の原因を自分を含めた環境に帰属できるようになるのは大きいです。失敗したときも子どものせいにせずに済む」

- ・
- ・
- ・
- ・

「いやあ、もう結構いい時間になりましたねー。そういえば某先生は『あらゆる心理学は全て行動分析学で説明できる』とどこかに書いていたような気がするけど、『行動分析学だけ教えていれば OK』とはまあならないだろうなあ……」

既に4時間近くが経過していた。そろそろ締めに入ろうかという空気が流れ出し、各々が感

想や反省を口にし始めた。あくまで「オンライン飲み会」として各々が好き勝手に語り合う会であったため、系統的な議論が積み重ねられたとは言い難いが、皆それぞれに好きなことを言い合うことができ、そのことに各自満足そうな様子であった。

研究者であるのか実践家であるのか、あるいは研究者の中でも基礎研究を専門とするのか応用研究を専門とするのか、具体的な専門テーマは何か、実践や研究の主なフィールドがどこであるのか、などといった参加者の立場によって「どんな風に行動分析学を教えているのか」というテーマに対する解が様々であるらしいことは十分に確認できたと思われた。

Cは「いやあ、なんか1人でめっちゃ喋ってごめんね！おしゃべりクソ野郎なんでw」と明るく自虐した。「いやいや、そんなことないよ！それにしても今日は楽しかったですね！」などとフォローするのが社会的妥当性の高い反応であると思われたが、夜も更け疲れているせいか誰もそのような反応を自発することはなかった。

最後にAが一言。「寝るぞ、諸君！」

編集後記

COVID-19 の影響で、様々な学会や研究会、講演会などがオンラインで行われるようになりました。ソーシャルディスタンスが叫ばれ、距離が離れて不便なこともありつつも、世界中の普段は聞けないような先生方の講義にアクセスできたり、Zoom 飲み会続きで以前より高頻度で顔を合わせてみたり（笑）と、遠かったものが近くなる現象も生じているのが興味深いです。ご時世に合わせて学習やコミュニケーションの新たなレパトリーを模索する日々は続きそうですね。行動分析学会についても、中止ではなく、オンラインでの開催

を獅子奮迅の取り組みで実現してくださった先生方に心から敬意を表するとともに深く感謝申し上げます。より安全で快適で、何よりも楽しいコミュニティとして発展するために、今までの枠にとらわれない斬新なアイデアを集めて乗り越えていけたらと願います。

さて、このニューズレターは次号で記念すべき 100 号になります！！古き良き時代を振り返りつつ、新たな時代を共に生きるみなさんの熱き原稿をお待ちしています。

(A.K)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで開催します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中 4-2-2

畿央大学 教育学部 大久保研究室内

日本行動分析学会ニューズレター編集部 大久保 賢一

E-mail: kenichi.ohkubo@gmail.com